

平成16年度の漁況

為石起司・曾田一志・向井哲也

1. まき網漁業

(1) 漁獲量の経年変化

図1に1960年（昭和35年）以降の島根県の中型まき網漁業における漁獲量の経年変化を示す。

2004年の漁獲量は約6万7千トンで、前年を6%上回った。浮魚類の漁獲量は1989年をピークに、マイワシ資源の減少に伴い減少傾向となった。近年では、マアジ、ブリなどの漁獲量が増加し、3年連続して前年を上回る結果となった。2004年は、特にマアジの漁獲が好調で、前年の163%、平年（過去5年間平均）の157%であった。

2004年のCPUE（1航海当たり漁獲量）も、マアジの漁獲好調により、28.9トン/航海で、前年を7%上回り2年連続の増加となった。

(2) 漁労体数の動向

中型まき網漁業の漁労体数は、1969年には78ヶ統あったものが、徐々に減少している（図2）。この原因としては、対象魚種の変化や漁労技術の発達、漁船の大型化などが考えられる。しかし、1990年代以降は、マイワシ資源の減少に伴う経営の悪化が最大の要因となった。また、2000年以降は減船事業の導入もあり漁労体数が急減した。

2004年の漁労体数は15ヶ統で2003年と同数であった。

(3) 魚種別漁獲状況

図3～7に島根県の中型まき網による魚種別月別漁獲動向を示した。

マアジ

2004年の総漁獲量は2万4千トンで平年の162%、前年の163%となった。

2004年は2003年級群（1歳魚）を中心に1～6月の漁獲が好調で、県東部を中心に平年を大きく上回った。夏場には平年を下回ったものの、秋以降は2004年級群（当歳

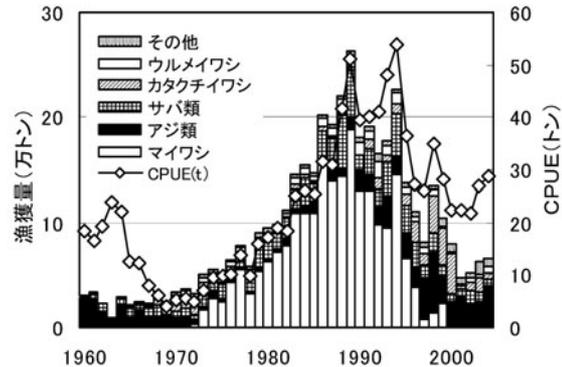


図1 島根県の中型まき網による魚種別漁獲量とCPUEの推移
（2002年までは農林統計値、2003以降は島根水試集計）

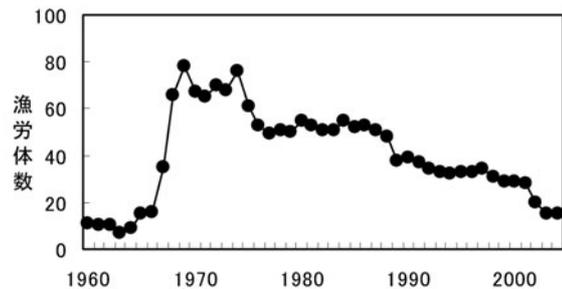


図2 島根県の中型まき網漁労体数の動向

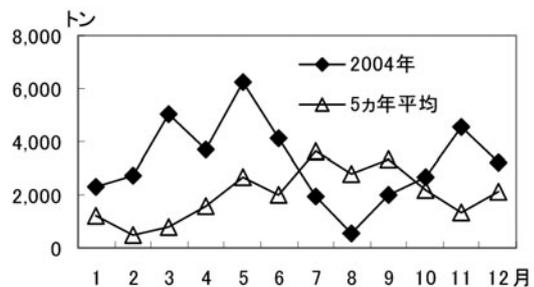


図3 中型まき網によるマアジ漁獲量

魚)の新規加入も好調で平年を上回った。

サバ類

2004年の総漁獲量は9,378トンで平年の74%、前年の78%となり、平年、前年ともに下回った。

漁獲の主体は豆サバ(0~1歳魚)で、2歳魚以上の親魚の漁獲は少なかった。11月以降、漁況が好転し12月は平年を上回る漁獲となった。

マイワシ

2004年の総漁獲量は496トンで平年の10%で、前年よりはやや漁獲量は増えたものの、依然として平年を大きく下回っている。マイワシ資源は全国的に低水準状態にあり、資源の回復は当分見込めそうにない状況である。

カタクチイワシ

2004年の漁獲量は5,449トンで平年の28%、前年の38%と低調であった。

カタクチイワシの漁獲量は1995年から2000年までは、冬期を中心として3万トン台の高水準を維持していたが、2001年には2,442トンにまで落ち込んだ。2003年は14,429トンまで回復したものの、2004年は春期が低調で再び1万トンを割り込む結果となった。

ウルメイワシ

2004年の漁獲量は6,283トンで平年の195%、前年の179%となり、1999年以降では最高の値となった。

漁獲の内訳を見ると、大半が県東部で漁獲されたもので、県西部での漁獲は極僅かであった。

2. いか釣り漁業

ここでは、いか釣り漁業(5t未満船)、小型いか釣り漁業(5t以上30t未満船)、中型いか釣り漁業(30t以上)によって浜田港に水揚げされたイカ類の漁獲動向をみた。

(1) スルメイカ

浜田港に水揚げされたスルメイカの漁獲動向を図8に示す。1999年以降900トン前後

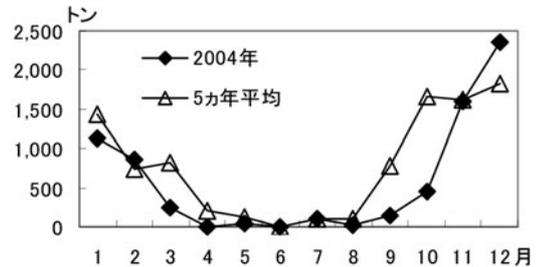


図4 中型まき網によるサバ類漁獲量

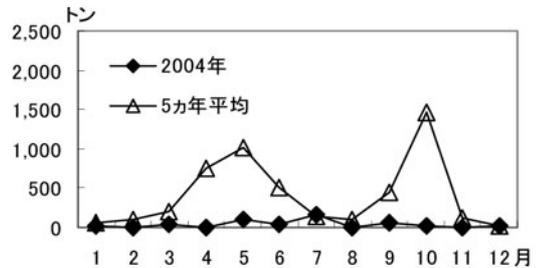


図5 中型まき網によるマイワシ漁獲量

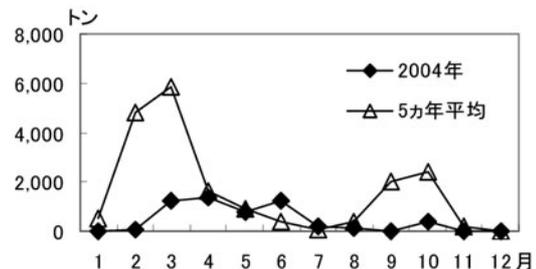


図6 中型まき網によるカタクチイワシ漁獲量

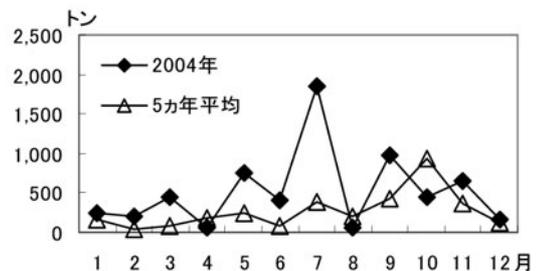


図7 中型まき網によるウルメイワシ漁獲量

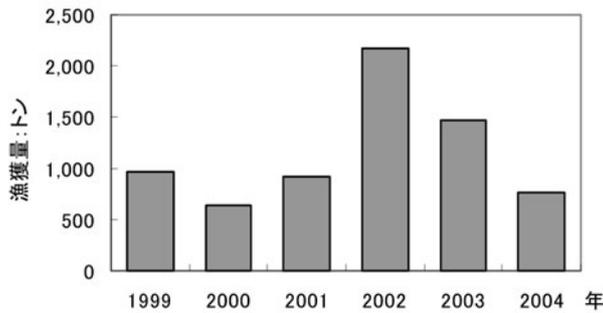


図8 浜田港に水揚げされたスルメイカの漁獲動向

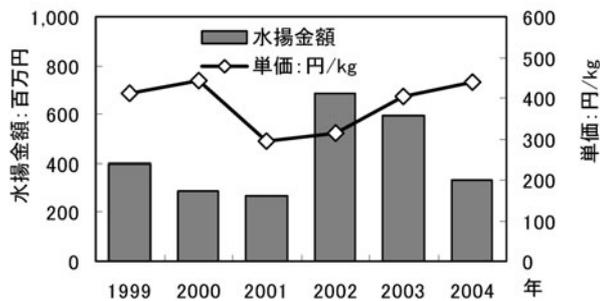


図9 浜田港に水揚げされたスルメイカの漁獲動向および水揚金額と単価の動向

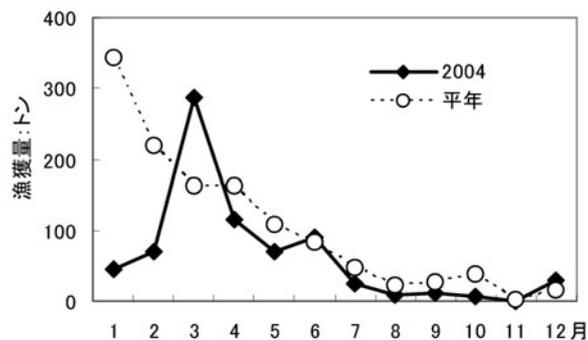


図10 浜田港に水揚げされたスルメイカの月別漁獲動向

の漁獲で推移していたが、2002年に漁獲量が大きく増加し2,178トンを記録した。しかし、その後2年連続の減少となり、2004年の漁獲量は759トンで、前年(1,465トン)の52%、平年(過去5年間平均:1,134トン)の61%と、2000年に次いで低い値となった。

水揚金額も3億3,196万円で、前年(5億9,269万円)の56%、平年(4億4,557万円)の75%に留まった(図9参照)。また、漁獲量が減少したため、2004年の単価は437円/kgと前年を32円上回り、3年連続の上昇となった。

図10に月別の漁獲動向を示す。2004年の漁獲動向を平年と比較すると、1、2月の冬場の漁獲が平年を大きく下回っていた。3月には平年を上回ったものの、その後は再び平年を下回って推移した。

1、2月に漁獲が少なかった主な原因としては、冬季発生群の産卵場への南下経路が極端に朝鮮半島沿いであったため、山陰沖にはわずかしか来遊して来なかったことが考えられる。また、近年日本海のスルメイカ資源は高水準にあったが、2003年に日本海で実施された資源調査では、前年を下回る結果が出ており、資源水準の低下も要因の一つであった可能性が考えられる。

(2) ケンサキイカ

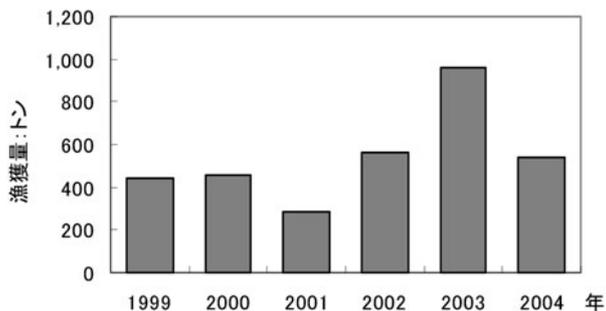


図11 浜田港に水揚げされたケンサキイカの漁獲動向

浜田港に水揚げされたケンサキイカの漁獲動向を図11に示す。

ケンサキイカの漁獲量は概ね500トン前後で推移してきた。2001年に減少した後は増加傾向となり、2003年には957トンとなった。2004年の漁獲量は541トンで、前年(957トン)の57%、平年(540トン)の100%と、漁獲が好調であった前年を下回ったものの、平年並みとなった。

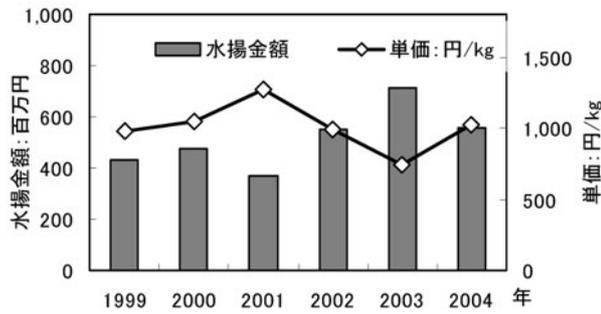


図 12 浜田港に水揚げされたケンサキイカの漁獲動向および水揚金額と単価の動向

漁獲量の減少に伴い、2004年の単価が1,026円/kgと前年を281円上回ったため、水揚金額は5億5,553万円で、前年(7億1,329万円)の78%、平年(5億758万円)の109%となった(図12参照)。

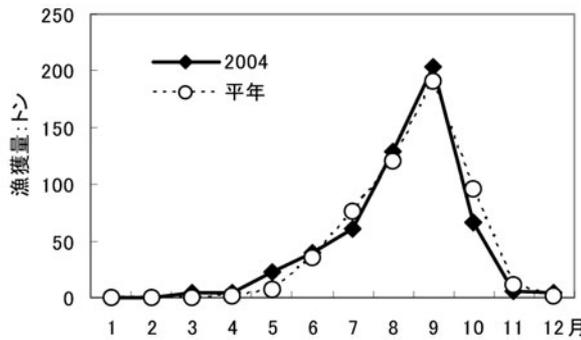


図 13 浜田港に水揚げされたケンサキイカの月別漁獲動向

図13に月別の漁獲動向を示す。2004年の漁獲動向は、平年同様5月から漁獲され始め、9月に漁獲のピークを迎え、11月には終息した。

3. 沖合底びき網漁業

本漁業は東経128度以東の日本海南西海域を漁場としており、浜田港を基地とするものは現在6ヶ統が操業している。操業期間は8月16日から翌年5月31日までで、6月1日から8月15日までは禁漁期間である。ここでは統計上、漁期年を用い、1漁期を8月16日から翌年5月31日までとした。

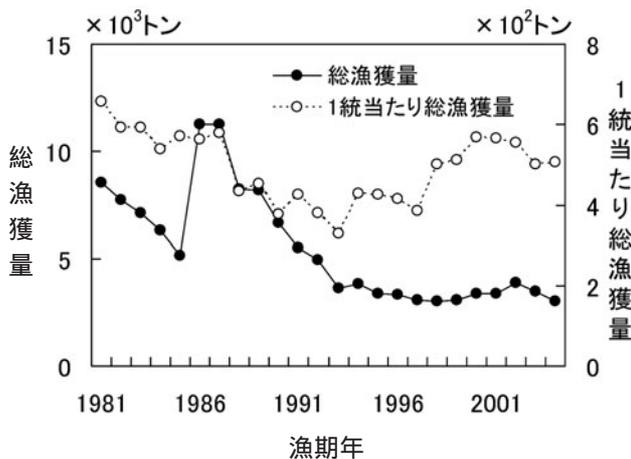


図 14 浜田港を基地とする沖合底びき網漁業における総漁獲量と1統当たり総漁獲量の経年変化

(1) 全体の漁獲動向

図14に1981年以降の浜田港を基地とする沖合底びき網漁業(以下、浜田沖底という)における総漁獲量と1統当たり漁獲量(以下、CPUEという)の経年変化を示す。

総漁獲量は、操業統数の減少により急激に減少したが、1993年以降3,000トン台で推移している。一方、CPUEは日韓新漁業協定が発効された1998年以降急増し、近年は500トン台で推移している。

2004年の浜田沖底の総漁獲量は前漁期を13%下回る3,038トン、CPUEは506トンであった。また、総水揚げ金額は16億7千万円、1統当たり水揚げ金額は2億7900万円で、昭和56年以降で最高の水揚げ金額を記録した。

今漁期は、前漁期に見られたようなエチゼンクラゲの大発生もなく、操業が順調に行われ

たこと、また漁獲の約2割を占めるイカ類の単価が前年を35%上回ったことや、概ね魚価が比較的高く推移したこと(前年比13%、平年比14%上回る)が主な要因と考えられる。

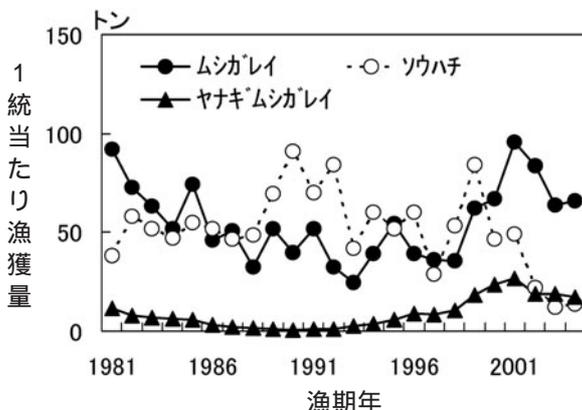


図15 浜田港を基地とする沖合底びき網漁業におけるカレイ類の1統当たり漁獲量の経年変化

1991年以降は急減し、3ヶ年で1/4まで減少した。2004年の漁獲量は83トンで、前年に引き続き100トンを下回る水揚げとなった。CPUEは14トンで、前年を14.7%上回ったものの、平年の29.5%に留まり、低調な水揚げとなった。

また、ヤナギムシガレイは1991年以降増加傾向にあったが、2001年以降は停滞気味である。2004年の漁獲量は104トン、CPUEは17トンで、前年の91%に留まったものの、平年を21%上回る水揚げがあった。

イカ類

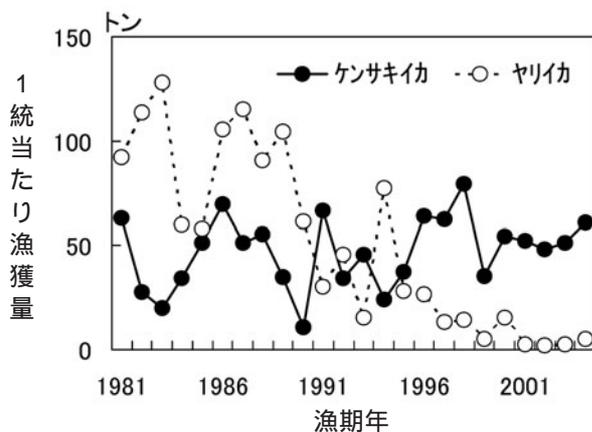


図16 浜田港を基地とする沖合底びき網漁業におけるイカ類の1統当たり漁獲量の経年変化

その他

図17に沖合底びき網漁業で漁獲されるカレイ類、イカ類以外の主要魚種におけるCPUEの経年変化を示す。

アナゴは1995年以降、周期的な増減を示し、近年は減少傾向にある。2004年の漁獲量は198トン、CPUEは33トンで、前年を6.7%上回ったものの、平年を8%下回った。

アンコウは1990年代に入り増加傾向にある。2004年の漁獲量は241トン、CPUEは40トンで、前年を13%、平年を74%上回り、1981年以降最高の水揚げとなった。

(2) 主要魚種の漁獲動向

カレイ類

図15にカレイ類のCPUEの経年変化を示す。

ムシガレイは1991年以降、周期的な増減を繰り返し、近年は減少傾向にある。2004年の漁獲量は394トン、CPUEは66トンで、前年を3%、平年(1994年~2003年平均)を20%上回った。

ソウハチは1990年以降、大きな変動を示しながら減少傾向にある。特に199

図16にイカ類のCPUEの経年変化を示す。

ケンサキイカは周期的に大きな変動を示し、近年は横這い傾向にある。2004年は冬~春にかけてまとまって漁獲され、漁獲量は365トン、CPUEは61トンで、前年を18.5%、平年を19.5%上回った。

一方、ヤリイカは1990年以降急激に減少し、近年は横這い傾向にある。2004年の漁獲量は30トン、CPUEは5トンであった。

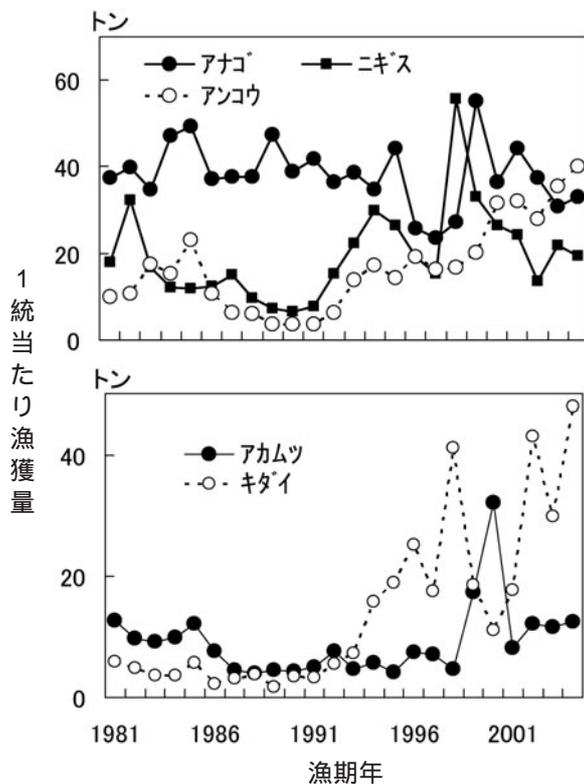


図 17 浜田港と基地とする沖合底びき網漁業における主要種の 1 統当たり漁獲量の経年変化

ニギスは 1998 年をピークに急激な減少傾向にある。2004 年の漁獲量は 117 トン、CPUE は 20 トンで、前年を 9.5%、平年を 26.5% 下回った。

キダイは 1994 年以降、周期的な増減を繰り返している。2004 年の漁獲量は 288 トン、CPUE は 48 トンで、前年を 60% 上回り、平年の 2 倍の水揚げがあった。

アカムツは 1999 年、2000 年と急増したものの 2001 年以降横這い傾向にある。2004 年は解禁直後の 8、9 月にまとまって漁獲され、漁獲量は 75 トン、CPUE は 13 トンで、平年を 14% 上回る水揚げがあったが、小型魚が少なかったのが特徴的であった。

4. 小型底びき網漁業第 1 種

本漁業は山口県との県境北西沖から隠岐海峡にかけての水深 80 ~ 180 m の海域を漁場とし、現在 58 隻が操業を行なっている。操業期間は 9 月 1 日から翌年 5 月 31 日までである (6 月 1 日から 8 月 31 日までは禁漁期間)。ここでは統計上、漁期年を用い、1 漁期を 9 月 1 日から翌年 5 月 31 日までとした。なお、ここでは温泉津漁協所属船を除く 57 隻分の集計値を用いた。

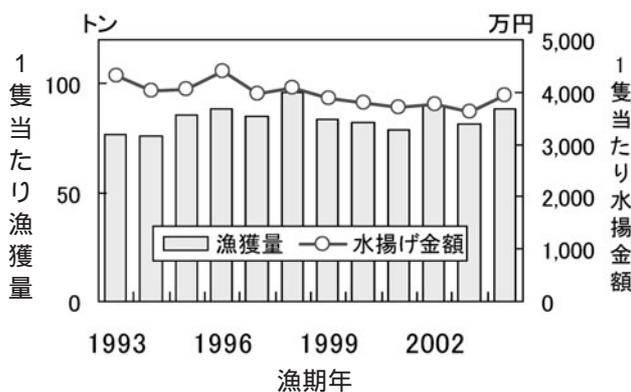


図 18 小型底びき網漁業における 1 隻当たり漁獲量と水揚げ金額の経年変化

(1) 全体の漁獲動向

図 18 に 1993 年以降の小型底びき網漁業 (以下、小底という) における 1 隻当たり漁獲量と水揚げ金額の経年変化を示す。

2004 年の小底全体の総漁獲量は 5,046 トン、総水揚げ金額は 22 億 5,000 万円であった。一方、1 隻当たり漁獲量は 88.5 トン、水揚げ金額は 3,947 万円で、前年に比べ、漁獲量、水揚げ金額とも 9% 上回った。

また、1 隻当たり操業日数は 136 日で前年並みであった。今漁期はエチゼンクラゲの大量来遊、木材流出事故等などの障害もなく、操業も順調に行われた。

(2) 主要魚種の漁獲動向

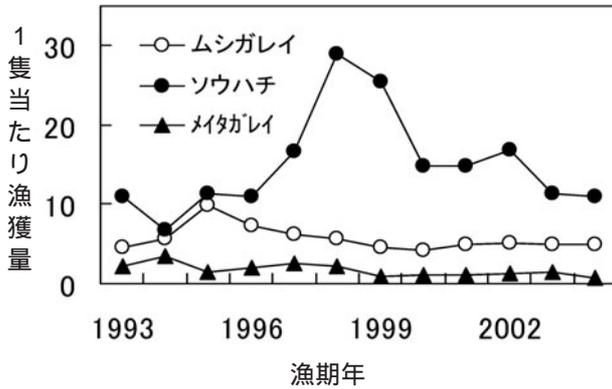


図 19 小型底びき網漁業におけるカレイ類の1隻当たり漁獲量の経年変化

カレイ類

図 19 にカレイ類の1隻当たり漁獲量(以下、CPUE という)の経年変化を示す。

ムシガレイのCPUEは1996年以降減少傾向にある。2004年の漁獲量は284トン、CPUEは平年(過去10年平均)を15%下回る4.9トンであった。

1998年をピークにその後急減したソウハチの漁獲量は632トン、CPUEは11.1トンで、前年を3%、平年を30%下回った。

メイタガレイの漁獲量は47トン、CPUEは0.8トンで、前年を45%下回り、平年の46%の水揚げに留まった。

この他のカレイ類のCPUEを平年値と比較すると、ヤナギムシガレイ(1.7トン)は10%増、アカガレイ(1.0トン)は3.1倍、ヒレグロ(3.7トン)は2.6倍の水揚げがあった。

イカ類

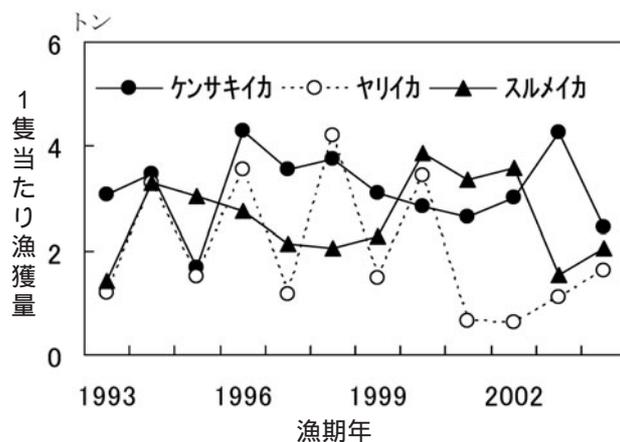


図 20 小型底びき網漁業におけるイカ類の1隻当たり漁獲量の経年変化

図 20 にイカ類のCPUEの経年変化を示す。イカ類は低調な漁獲であった。

ケンサキイカのCPUEは2001年以降増加傾向にあったが、2004年は低調であった。漁獲量は140トン、CPUEは2.5トンで、好調だった前年の58%、平年の75%の漁獲に留まった。

一方、ヤリイカのCPUEは2001年までは1年おきに好不漁を繰り返していた。2004年の漁獲量は93トン、CPUEは1.6トンで前年を4

6%上回ったが、平年の77%の漁獲に留まった。

スルメイカの2004年の漁獲量は117トン、CPUEは2.1トンで、前年を34%上回ったものの平年の74%の漁獲に留まった。

その他

図 21 に小底で漁獲されるカレイ類、イカ類以外の主要種におけるCPUEの経年変化を示す。

近年増加傾向にあるアンコウは中型魚を中心に356トンの水揚げがあった。CPUEは6.2トンで、平年を18%上回った。

ニギスはほぼ前年並みに留まり、漁獲量は694トン、CPUEは前年を3%下回る12.

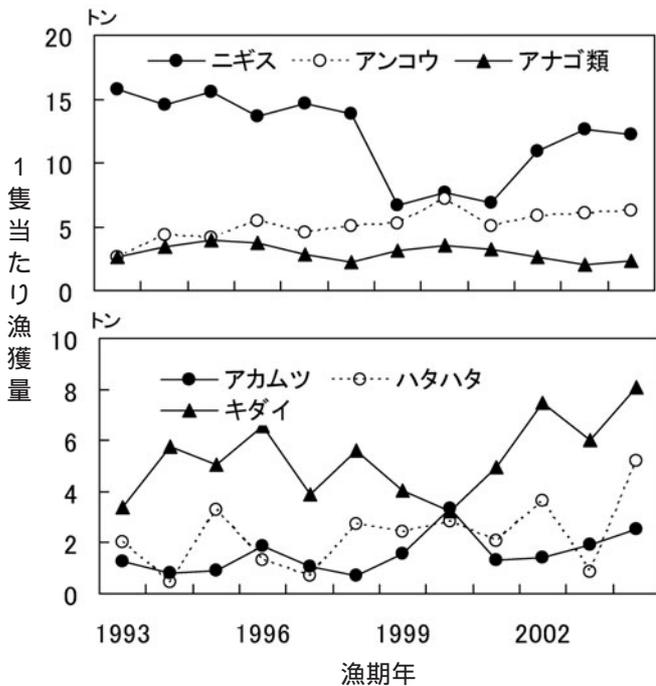


図 21 小型底びき網漁業におけるその他主要魚種の 1 隻当たり漁獲量の経年変化

2 トンであった。

アナゴ類の漁獲量は 130 トン、C PUE は 2.3 トンで、前年を 10 % 上回ったが、平年を 26 % 下回った。

周期的な変動を示すアカムツの漁獲量は 145 トン、CPUE は 2.5 トンで前年の 1.3 倍、平年の 1.7 倍漁獲があった。

キダイの漁獲量は 460 トン、CPU E は 8.1 トンで、前年を 34 % 上回り、平年の 1.5 倍の水揚げがあった。

ハタハタの漁獲量は 296 トン、C PUE は 5.2 トンであった。春漁が好調に推移し、平年の 2.6 倍の漁獲があり、ここ 10 年で最高値となった。

5 . ばいかご漁業 (石見・出雲海域)

本漁業は小型底びき網漁業 (第 1 種) 休漁中の 6 月 ~ 8 月にかけて行われており、稼働隻数は 6 隻 (石見部 5 隻、出雲部 1 隻) であった。解析に用いた資料は、ばいかご漁業漁獲成績報告書と漁獲統計資料 (大田市漁協、和江漁協、仁摩町漁協、平田市漁協) 各漁業者に記入依頼を行なっている操業野帳である。これらの資料をもとに、漁獲動向、エッチュウバイの価格動向および漁場利用について検討を行なった。また、資源生態調査として、大田市漁協、和江漁協ならびに仁摩町漁協に水揚げされる漁獲物の殻長を銘柄別に測定し、この結果と銘柄別漁獲箱数からエッチュウバイの殻長組成を推定した。さらに、Deluryの方法によりエッチュウバイの資源量を求め、漁獲率の推定を行なった。

(1) 漁獲動向 (図 22 ~ 24)

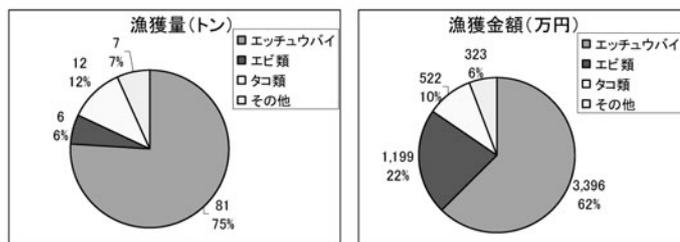


図 22 平成 16 年度ばいかご漁業 (石見・出雲) の漁獲量・漁獲金額 (*全船)

漁獲量は依然低い水準で横ばい状態であった。漁獲量は前年並みだが金額は大幅に減少した。エッチュウバイの漁獲量は 80.5 トン、水揚げ金額は 3,396 万円で稼働隻数は 6 隻であった。1 隻当たりの漁獲量は 13.7 トン、576 万円であり (忠栄丸除く) 漁獲量で前年比 96 %、平年 (過去 10 年) 比 8

7 % だったが、金額では前年比 82 %・平年比 62 % と大きく落ち込んだ。

また、1 航海当たりの漁獲量は 414 k g で前年比 96 % と横這いだったが、過去 10 年間の平均 480 k g に比較すると依然低い水準にある。さらにその他の漁獲物も含めた 1 隻当たりの総漁獲量は 21.1 トン、総水揚げ金額は 1,088 万円で、量で 17 %、金額で 4 % 前年度

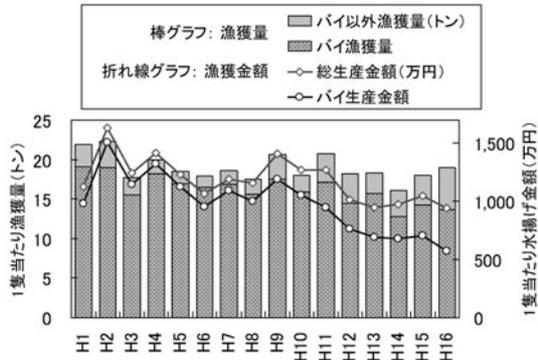


図23 ばいかご漁業における1隻当たり漁獲量・水揚げ金額の推移（*忠栄丸除く）

を上回ったが、過去10年間の平均18.4トン、1,145万円に比較すると依然低い水準にある。漁獲物の組成は前年度とほぼ同じで漁獲の中心は殻長68～100mmの中・大型貝であり、近年は平成10年頃と比較して80～100mmの大型貝の減少が著しい。

(2) 漁場 (図25)

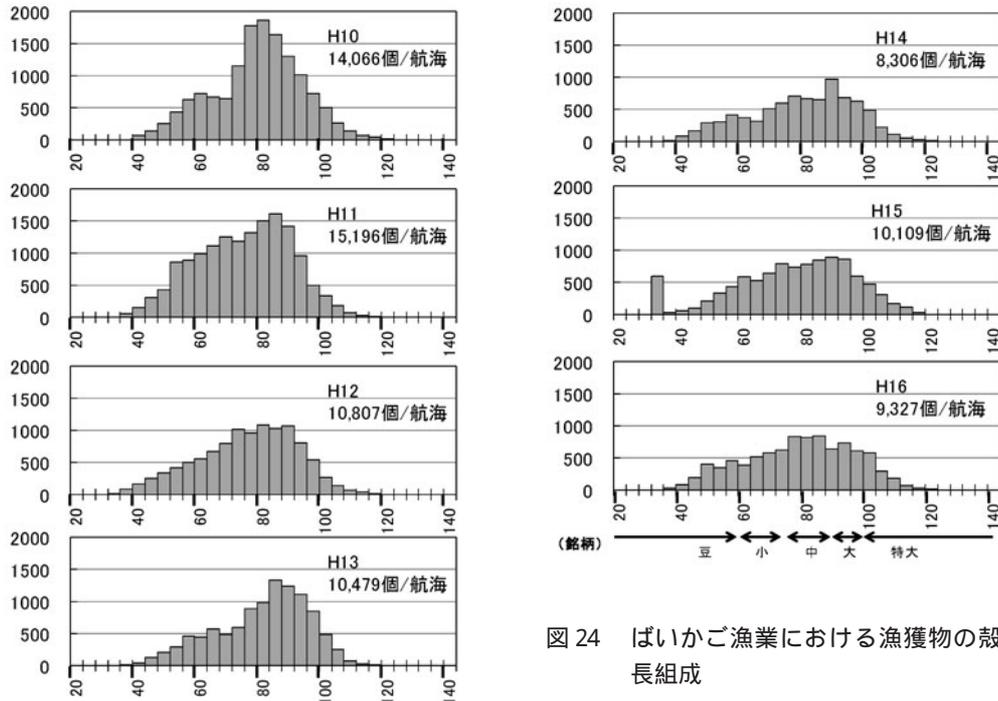


図24 ばいかご漁業における漁獲物の殻長組成

漁場の利用状況は前年とほぼ同じ状況であり、N 35°35～45、E 132°10～30 付近の漁場の集中化が見られた。

(3) 魚価の推移 (図26～27)

エッチュウバイの1kg当たり平均価格は県西部で418円（前年比71円）、平田市漁協で472円（前年比66円）であり、平成10年度以降価格の下落傾向が止まらない状況にある。特に大～特大サイズの価格下落が著しい。16年度の大型のエッチュウバイ価格下落は、他県や輸入品の増加による供給過剰が一因と思われる。

(4) 資源状態 (図28)

Deluryの方法で求めた大田市沖合域漁場のエッチュウバイの推定資源量は184トンで、推定漁獲率は43.8%となった。推定資源量は15年度の130トンより多い結果となったが、CPUE（1航海あたり漁獲量）は15年と大きく変わっておらず、資源状態は依然低迷していると考えられる。

(5) その他

エッチュウバイの価格向上のため、浜田水産事務所と連携して漁獲物の高付加価値化のための活動を実施した。16年度は「新たな漁業経営チャレンジ事業」により石見部のバйкаゴ漁船全船に海水冷却装置を導入し、漁獲物の高鮮度化を図った。価格向上効果は直ちには見られなかったが、今後もエッチュウバイのブランド化の取り組みを進めてゆく。

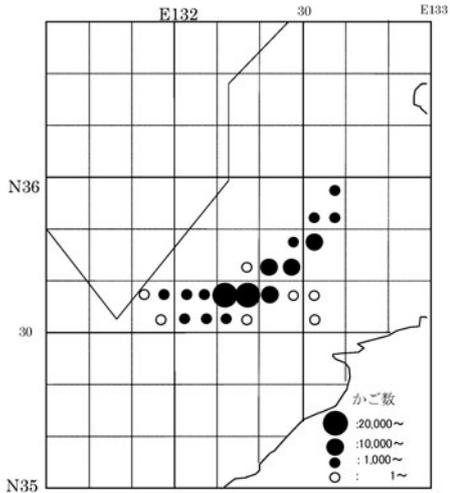


図 25 平成 16 年度ばいかゴ漁業の漁場 (カゴ数)

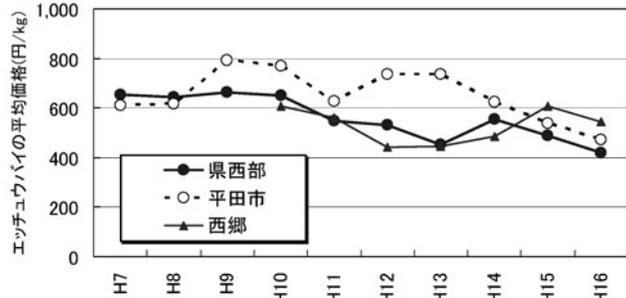


図 26 県内エッチュウバイの夏期 (6 ~ 9 月) における単価の推移

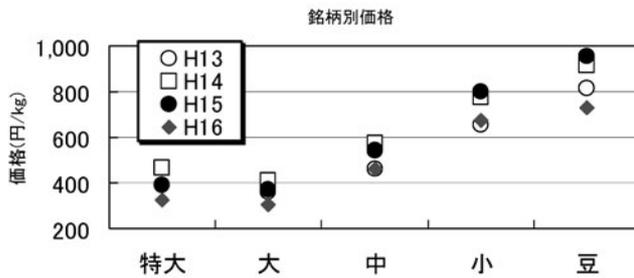


図 27 エッチュウバイの銘柄別単価

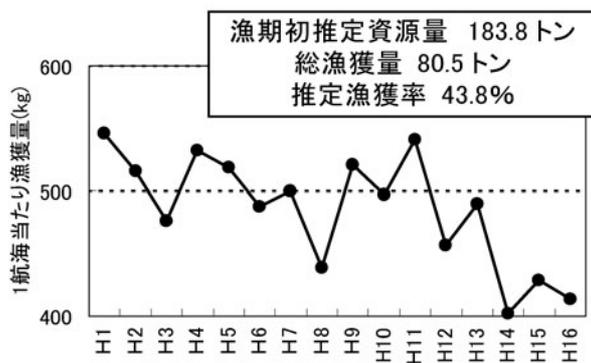


図 28 ばいかゴ漁業における CPUE (1 航海当たり漁獲量) の推移 (* 忠栄丸除く)